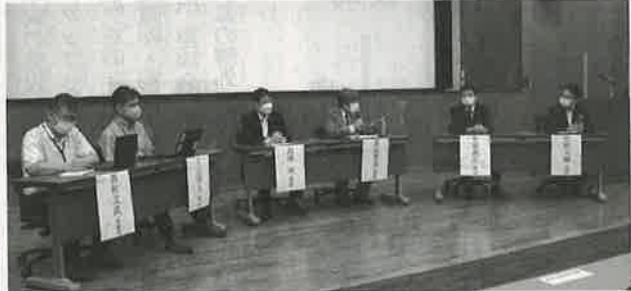


水道協会による「水道施設の維持・修繕に係わる物と同じ「目視その他適切な方法により行う」と

50周年、学会の未来を語る

水環境学会 第25回シンポジウムを開催

日本水環境学会(会長 西嶋渉・広島大学教授)は7~8日の2日間 にわたり、東京大学本郷キャンパスとオンライン形式のハイブリッドで「第25回日本水環境学会シンポジウム」を開催した。水環境分野の幅広い研究の発展と会員相互の情報交換を促進する場として毎年実施している。同学会の各研究委員会が7会場で並行してセッションを行い、知見を共有した。会場参加とオンライン合わせて514人が参加した。



学会の将来を語り合ったパネルディスカッション

また、今回は同学会が昨年設立50周年を迎えたことを受け、50周年特別企画を実施。▽流域物質動態とノンポイントソース研究委員会(中島典之・東京大学教授)▽水中の健康関連微生物研究委員会(片山浩之・東京大学教授)▽マイクロプラスチック研究委員会

(高田秀重・東京農工大教授)▽嫌気性微生物処理研究委員会(西村文武・京都大学教授)の4委員会が活動内容を紹介し、西嶋会長を交えて、パネルディスカッションを行った。

提供すると、中島教授は「研究委員会同士の合同研究や、他学会とも連携するなど柔軟な取り組みが必要」、片山教授は「新型コロナウイルスに関連した下水道調査のように横断的なタスクフォースの設立による対応も考えられる」、西嶋会長は「研究委員会の活動に伴う知見の集積が次の活動

や人材育成、学会の将来展開といったテーマで展望を語り合った。佐野教授が「現在20の研究委員会がそれぞれのテーマで活動を進めているが、現在の体制でカバーしていない新たな汚染物質が問題になった際、学会としてどのような対応ができるか」と話題を

機関連誌に掲載された論文から優れたものを選考する年間論文優秀賞(メタウォーター賞)の表彰および論文発表、若手研究紹介セッションにおける優秀な発表を表彰する博士研究奨励賞(オルガノ賞)の表彰式も行った。

メタウォーター賞に選ばれた「クロロエチレン類の脱塩素化」に用いる水素供与体としてのグルコ

ン酸の汎用性(大林組技術研究所、大阪大学大学院工学研究科)は、汚染地下水の浄化手法として広く用いられている嫌気脱塩素化技術において、グルコン酸の有用性を示した。水質の異なる5カ所の水源から採取した地下水を対象に浄化能力の検証を行い、いずれの水源においても完全脱塩素化が達成されたことから、多種多様な水質においてクロロエチレン類の浄化にグルコン酸が有用であることを確認した。さらに、グルコン酸が安価で浄化技術の低コスト化に寄与することや、検証に遺伝子分析などを活用していることなどが評価され、受賞となった。

次回シンポジウムは、2023年9月20~21日に大阪大学吹田キャンパスで開催予定。

閉会にあたり、西嶋会長は「昨年、一昨年のシンポジウムはオンラインで開催となり、ハイブリッドという形で2年ぶりに皆さんと顔を合わせることができて嬉しく思う。また、コロナ禍の中でも行事の開催方法を工夫してきたことから、オンライン開催にも慣れることができた。今後もオンラインの参加のしやすさを生かしながら、多くの方と情報共有できる場をつくってほしい」と語った。

断水区域の約半分にあつた。川崎市の中期計画を

参加募集
11月仙台で開催
日本下水道協会、欧州水協会(WEWA)、米国水環境連盟(WEF)は11月15~17日の3日間、仙台市の仙台国際センターで第7回特別会議を開催する。テーマは「下水道におけるレジリエンス」。日米欧の下水道専門家による研究発表会で、国内から15編、海外から14

日米欧の下水道専門家会議
編の研究発表が予定されている。海外からの発表では下水道一体の取り組み事例発表もあるため、事務局では水道関係者にも参加を呼び掛けている。使用言語は英語だが、同時通訳もある。12月中旬以降にはオンライン配信も行う予定。聴講料は無料。参加希望者は10月14日まで申し込む。詳細は下水道ホームページで。

水道産業新聞
2022年(R4)9月29日(木)
川崎市の中期計画を
下水道機構 技術サロンの話題

断水の中、応急給水活動が続いている。静岡市の給水車10台に加え、日本水道協会により静岡県支部から8台、中部地方支部から26台の給水車が

実施。計画期地区で対策を講じた、「令和元年風」により排地域で深刻な発生したことを中期・長期的を進めている。同市の下水道の温室効果量は市役所の約18%と大き